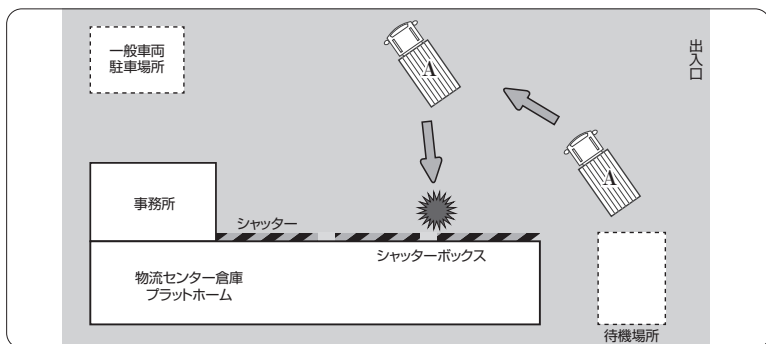


職場における交通安全指導

Part 129

大型貨物車が構内でバックした際、シャッターボックスに衝突



■事故の概要

●事故の当事者

当事者A：大型貨物車、40歳代、男性
 当事者B：食品工場（シャッターボックス）

●被害状況

A：車両リヤドアフレーム小破
 B：シャッターボックス脱落損壊

事故状況

大型トラック運転経歴20年のベテランドライバーAは、運送会社に勤務し食品工場から製品を大型スーパーや物流センターへ1日2回配送しています。

事故当日は、午前中の配送が事故渋滞により遅れたため、午後からの積み込み時間が予定より1時間ほど遅れてしまい、気持ちが少し焦り気味だった。

Aはトラックを待機場所に着け、物流センターの事務所に配送の遅れを報告し、製品の積下ろし

を行うため待機場所から急いで車両を動かし、プラットフォームに向けてバックで進入したところ、シャッター上部に設置されていたシャッターボックスに衝突して損壊させた。

事故の原因

事故の原因は、後方の安全確認が不十分なままトラックをバックさせたことです。

トラックには死角部分が多く、バックする際には、細心の注意を払う必要があります。しかし、配送時間の遅れが焦りとなって冷静さを失い、下車して目視確認をせずにサイドミラーやバックモニターだけに頼って周囲の安全確認を怠り安易にバックしてしまいました。

この背景には、時間の遅れの焦りのほかに、1日2回の配送慣れからAに油断が生じてしまったことも隠れています。

安全指導

(1) 構内事故の防止

今回の事故は、バックする前に下車し、目視確認をしていればシャッターの開閉状況やシャッターボックスの位置を確認でき、事故を未然に防ぐことができました。しかし構内では、今回のような後退事故が多発しています。

構内事故の多くは、荷主や取引先で発生し、軽微な事故であっても、ドライバーのモラルに加え運送会社の運転教育の姿勢が問われ、信用・信頼を大きく失墜させ、その回復には長い時間と努力が必要となります。

ドライバーに対しては、軽微な構内事故であっても「小さな事故でも大きな危険が隠れている」という認識を持たせ、事故原因と防止策を指導することが大切です。

(2) 安全確認の徹底

構内事故の原因には「構内だから」という油断も挙げられます。特に通慣れた構内では気の緩みから、緊張感が低下し油断を招きがちです。

慣れた構内であっても環境は常に変化しています。ハンドルを握っている間は常に緊張感を持つことが大切です。

<構内事故の発生状況>

衝突物	構内事故件数	
	件数	構成率(%)
車両	302	45.7
構内施設	117	17.7
建物	121	18.3
シャッター	39	5.9
フェンス・塀	38	5.7
門柱	31	4.7
その他	13	2.0
合計	661	100

※1. 2021年度対物事故総件数は1,690件

2. 対物事故のうち構内事故の割合は39.1%

(3) 危険を予測した運転の励行

構内は馴染みのある場所が多く、油断を引き起こしやすいものです。また、バック時に全体の状況を把握したつもりでも、油断からくる見落としにより、上部にある建物のシャッターや庇などに衝突する場合があります。

また、構内では走行速度が遅いことや他車の大半が停まった状態であることが多く、通常の走行より緊張感が薄れがちになってしまいます。

特に構内の出入口に面する歩道にも歩行者がいる可能性がありますので、気を抜くと重大な対人事故に繋がる恐れがあります。

構内では、普段以上に慎重な運転が必要です。

構内事故防止のポイント

- 急いでいると事故を起こしやすいので忙しい時ほどゆっくりと、構内では徐行運転を心掛け、バックの際は人が歩く程度の速度で走行する。
- 構内の状況は刻々と変化するため、絶えず周囲の状況を確認して、走行車両、歩行者の有無、看板・庇など障害物となる構造物（特に上部）などに注意を払う。
- バック時は、ミラーやバックモニターだけに頼ることなく、必ず下車し後方や周囲の状況を目視で確認する。
- ハザードを点灯し、周囲に注意喚起するとともに、安全確認を確実にを行うために、声を出して自分の脳に注意を促すコメントリー運転を実践する。

脳は目から得た情報を認知、判断して整理・伝達するので、声による耳からの情報がより早く正確に伝わるといわれています。

構内事故は会社の信用・信頼問題にも繋がりますので、「だろ運転」でなく「かもしれない運転」を励行し、緊張感を持った安全運転に努めましょう。